

## 令和7年度 やまなし教育会議 会議録

開催日時 令和7年8月26日（火） 14:30～16:35  
開催場所 山梨県防災新館 401会議室  
出席委員 知事 長崎幸太郎  
教育長 荻野智夫  
村上憲司、田草川耕、篠原健、原和之、石川公司、伊藤祐寛、小西静穂、  
鈴木信行、加藤真紀子、日向直也、依田貴司、高相正樹  
事務局 小澤清孝総合県民支援局長、  
三科まなび支援課長 ほか まなび支援課員2名、  
佐々木邦彦教育次長、秋山克也教育監、高見澤圭一教育監、  
望月勝一次長、矢崎孝副参事、岩出修司総務課長、  
石原武人教育企画室長、西川一枝教育委員会事務局企画調整主幹、  
一瀬清福利給与課長、田邊靖博少人数・義務教育指導監、  
大久保雅司高校教育課長、玄間修特別支援教育・児童生徒支援課長、  
長坂嘉久学校施設課長、穴水美奈子社会教育課長、  
山本晃司保健体育課長、梶原はるか子育て・次世代サポート課主査

### 次第

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 議事
  - (1) 子どもたちの夢や希望を育むためにどのような体験が必要か
    - ① 子どもの「好き」や「得意」を伸ばす場やきっかけの作り方、効果的な提供の仕方
    - ② 体験の質、現実とバーチャルのバランスのとり方、実際に体験することの大切さ
  - (2) その他
- 4 閉会

### ■長崎知事挨拶

今日は大変ご多用のところお集まりいただきましてありがとうございます。この会議は山梨の教育関係について様々な方から色々な意見をいただいて、大きな方向性を生み出して行こうという会議であります。今日は昨年度いただいたご意見を踏まえて、「子どもたちの夢や希望を育むための体験」をテーマにしてご議論いただきたいと思います。いただくご意見を踏まえてオール山梨体制で、教育振興に重要なきっかけとなる会議でありますので、ぜひ今日はどうぞよろしくお願いいたします。

## ■石原まなび支援課総括課長補佐

ありがとうございました。協議に先立ちまして、本日の会議についてご説明いたします。参考資料1をお願いいたします。まず、やまなし教育会議について簡単にご説明させていただきます。この会議は、知事と教育関係者が意思の疎通を行い、オール山梨体制で、本県の教育の振興を図るため設置するものでございます。次に参考資料2をお願いいたします。やまなし教育会議設置要綱でございます。今回は要綱第2条にありますとおり、教育大綱に定める施策を実施するにあたっての課題と、これからの山梨の教育等について、皆様からご意見をいただきます。また、要綱第五条により、会議は原則として公開するとともに、第6条により、会議終了後に議事録を作成し、県のホームページ等で公開いたしますので、ご了解ください。それでは議事に移らせていただきます。なお、委員の皆様にご発言の際のお願いがございます。ご発言の際はマイクの電源をオンにいただき、ご発言が終わりましたら、マイクの電源をオフにいただきますようお願いいたします。それでは議事の進行につきまして、長崎知事にお願いいたします。

## ■長崎知事

それではよろしくをお願いいたします。先ほど申し上げましたように、今回は「子どもたちの夢や希望を育むためにどのような体験が必要か」をテーマにしたいと思いますが、幅広いものですから2つの副題に分けて、それぞれについてご議論いただきたいと思います。まず1つ目は、子どもの好きや得意を伸ばす場やきっかけの作り方、効果的な提供の仕方というもの。2つ目は、体験の質、現実とバーチャルのバランスのとり方、実際に体験することの大切さ。これらを2つの柱としてご議論いただきたいと思います。それではまずご参考にしていただきたいと思いますので、教育長から学校における取り組み状況などについて話題提供をお願いいたします。

## ■荻野教育長

教育長の荻野と申します。よろしくお願いいたします。まず私から子どもたちの体験に関わる現在の公立の小中高等学校、特別支援学校における取り組みについて、いくつか事例を紹介させていただきます。

まず小学校ですが、低学年では街探検やおもちゃ作りなどの体験を通じて身近な社会や物づくりへの興味関心を育てる取り組みをしています。中学年においては、少しお兄さんお姉さんになりますので、施設見学、職業インタビュー、自分の夢の発表を通じて働くことの関心や自分の将来について考えるきっかけづくりを行っています。高学年になると、地域のボランティア、福祉関係の施設への体験活動、社会の一員としての役割を体験する形で、他者との関わり、支え合いの大切さを学んでいます。また、高学年でも発表の場を設け、自分の考えや体験を他者に伝える経験を積む機会を意識しています。

中学校では、小学校での様々な体験を踏まえ、県内企業訪問、職場体験、進路学習

などを通じて自分の進路を主体的に考える機会を提供するようにしています。職業人によるキャリア講座、小学校以来の学びの記録や将来の目標などの変遷を記録したキャリアパスポートを活用して、多様な職業や生き方に触れる中で、価値観や興味を整理しながら将来像を描く支援・活動が行われています。

高等学校では、実際に職場にお邪魔して仕事を体験するインターンシップ、留学、地元企業とのコラボ商品の開発、例えば地元の企業と生徒のアイディアで食品を作って販売するような活動など、より専門的・実践的な学びを展開しています。

海外の生徒との交流は、先日も中学生が忠清北道へ行き、体験をしてきたところですが、10月には忠清北道から韓国の高校生が本県に来て、本県の高校生と交流する形になっています。或いは文化芸術活動への体験を通じて、広い視野、豊かな感性、世界に目を向ける力を育てたいと思っています。

近年では、地域課題の解決に向けて学校の枠を超えて探究活動を展開する生徒、学校とのコラボで探究するようなケースも増えています。工業高校等では地元産業界と連携した実習などを通じて、技術力・実践力を兼ね備えた将来の本県産業を支えていく人材の育成に取り組んでいるところです。特別支援学校においては、企業との連携や商品開発、先日、知事にもご協力いただいてローソンと共同開発した桃デニッシュの話題があったかと思いますが、そのような活動や産業現場での実習、地域住民との交流などを通じて実践的な学びを行い、卒業後の自立に向けて学びの機会を提供しているところです。

様々な事例をご紹介させていただきましたが、それぞれ発達の段階に応じて可能性や適性に気づき、夢や希望に繋げていくというための取り組みを行っています。このような実践を含めつつ、さらに効果的な体験のあり方、或いは学校に限らず家庭や地域など様々な視点からのご意見を本日いただければと思っています。簡単ですが以上で報告とさせていただきます。よろしくお願いします。

## ■長崎知事

ありがとうございます。それでは早速ご意見をいただきたいと思います。子どもの好きや得意を伸ばすきっかけ作り、効果的な提供の仕方、夢や希望のきっかけ、好き・得意をどうやって見つけさせるか、見いだしてもらうか。これらについてそれぞれご意見をいただきます。それでは村上さんから順番に時計回りでお願いします。

## ■村上様

山梨県市町村教育委員会連合会会長の村上と申します。よろしくお願いいたします。

今、教育長さんのお話でもありましたように、様々な形で子どもたちは体験をしているようですが、実際に子どもたちに届くというのは、タイミングや子どもの状況ですごく難しいところもあると思います。私は小学校の教員をずっとしておりましたので、そのときの経験をもとに少しお話しさせていただきます。学校にいる時からずっと子どもたちや先生方にも、体験や経験は食事と同じだという事をよく話していまし

た。あまり意識しない、そしてそれが何になるかというのはなかなか分かりづらいのですが、でもそれがないと栄養失調みたいに心や特に脳の発達に行き届かないところがある、だからすごく大事なのだと話した記憶があります。そうは言っても全ての体験が子どもたちに届くかというと、なかなか難しいのは先ほど言った通りです。

女の子の例ですが、勉強が得意ではない子がいました。その子は勉強に苦手意識があり、色々なことに取り組まないところがありました。ある時その子が作文を一生懸命書いている姿を見て、普段と違う様子を担任として感じました。その作文を見て、この子はもう少し頑張ればすごく良い表現ができると思い、「もう少しここを直して頑張ってみないか」と、認めながらも「もう少しこうしたらどうか」と言いました。何度か書き直し、結局それが地元のちょっとしたものに入賞して、その子にとってはそれがすごく喜びだったようです。卒業アルバムの時には作文がすごく得意になったと書いていました。

特に小さい子どもの体験は、大きなものではなくても一つ一つの積み重ねが次に繋がります。それが継続することで新たな夢とか、新たな希望へ繋がっていくのではないかと思います。ただ何でもすぐ認めるのではなく、子どもたちが頑張れば手が届くような課題を与えるのが大人の大事なところではないかなと感じました。自分の力で成し遂げ、認められた喜びをたくさん与えられれば良いと考えています。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは田草川さんお願いいたします。

## ■田草川様

公立小中学校長会の田草川と申します。私は今、笛吹市立一宮西小学校の校長をしております。小学校の目線という形でお話をさせていただきます。

子どもの好きや得意を伸ばす場やきっかけの作り方、効果的な提供の仕方というタイトルですが、子どもの心に残る体験をさせるということを、常日頃考えています。職員ともこの話題について一緒に考えましたが、子どもが自分で一生懸命取り組んだ事は必ず心に残るのではないかと話していました。あとは仲間と協力をするということ、そして同じ目的を達成したことはすごく心に残っているということが過去の経験であったという事で、私も同感だと考えながら話をしました。そして今好きだと思える瞬間を作っていくことに関しましては、分かるとかできるということを経験させる体験させる、そういう瞬間が必要になってくるとすごく感じました。個々によってそれぞれレベルは違うので、その子に応じた目的目標を与える中で、達成感を味わわせることがすごく大事だと感じました。

あと、授業や行事において、成功体験を感じさせる場面づくりを教員がしっかり仕組んでいくことがすごく大事だと思います。その得意を伸ばしていくためにどうしたらいいかということで、色々な生活場面の中で色々な体験ができる機会をたくさん子

どもに与えることが大事だということ、そしてその体験を通して、これ良いかなと選択ができるような興味あるものを自分で見つけていけるような場を作ってあげられたら良いと思いました。子どもの活動を肯定的に見取り、興味のあることに関しては伸び伸びと活動させてあげる、子どもが興味を持ったことをサポートしてあげるスタンスで関わるのが良いのではないかということで、お話しさせていただきました。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは篠原さんお願いいたします。

## ■篠原様

山梨県高等学校長協会の篠原と申します。当組織は県立の高等学校だけではなく私立高等学校の校長、それから特別支援学校の校長も籍を置いている組織です。私自身高校に在籍しているので高校目線でのお話になりますが、よろしくをお願いいたします。

先ほど荻野教育長からもお話がありましたが、高等学校においても様々な取り組みをしています。国際交流等、多様な価値観との出会いは当然必要ですし、芸術活動等で自分を表現する活動、それから尊敬できる大人との対話として講演会、挑戦と成功の体験として学園祭等の取り組み、社会へ出ていく今後の出会いとしてインターシップ就業体験等を実施しています。どのような体験が必要かですが、高校だと知識の習得がメインになりますが、これだけではだめだと考えております。知識の習得は極端な話をすれば、教員がいなくてもできると思っています。YouTube等で様々な学習教材があるので、そこだけではなくて心を動かす体験が不可欠になっていると考えています。ただ子どもたちは非常に多様な価値観を持っています。一人ひとり違います。効果的な場と言われると、なかなか難しいと考えております。学校においては、これまで取り組んできた体験活動を今後もできる限り提供していく中で、子どもたちの多様な価値観に応えていく必要があると考えております。子どもたちには向き不向きもありますし、得手不得手もあります。何に興味を示すかということは人それぞれであろうと思います。時には失敗をすることも大切だと考えております。そういった中で、自分と他者の違いを認めていくことも必要だと思えます。

教育長の話の中に「探究活動」というキーワードが出てきたわけですが、各学校ではかなり探究活動に力を入れております。「なぜ」という素朴な疑問を元に、興味関心のあるところを出発点に自ら問いを立てて学びを深めていく。その過程の中で他者と協働したり、場合によっては学校以外のところへ出てフィールドワークをしたり、地域の方から学んだり、試行錯誤しながら取り組んでいく。最終的には自分の集めた情報を成果という形で発表します。発表することで他者から評価をもらいますし、自分にはなかった視点というアドバイスをいただきます。それを受けてさらに自分の考えをまた深めていく。こんな活動を今どちらの学校でもやっているような状況かなと思います。あと教員個人としてできることとして、成功体験を大切にしていける必要があ

と思います。成功を認めること、それだけではなくその過程でどんな変化があったのかをよく見て声かけをしていくということが大切だと思います。また教員自身が自分自身の経験とか、生き方とかを自分の言葉で子どもたちに伝えていくことも大切なのではないかと考えております。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは県教職員組合の原さんお願いいたします。

## ■原様

山梨県教職員組合の原と申します。私どもは、公立の中学校の教職員で構成する団体です。よろしくお願いします。小中学校の立場から話をさせていただければと思います。これまでの話と少し重なるところもあるかもしれませんがご了承ください。

子どもの「好き」ですが、本当に多様なものでなかなか評価されにくい領域だと思います。その中において教職員はその子どもの目を逃さずにしっかり肯定的な言葉を返していく、褒めてあげる、達成感を認めてあげることが必要だと思います。その中で自分もできるという自己肯定感が育ち、自己肯定感を育てることによって、一步を踏み出すきっかけ作りになるかと思います。体験についても活動についても、子どもたちが選択する場があるということが大事かと思います。やらされるのではなく自分から選んでいく、自分から進んでやっていくというステップアップが大事かと思います。そのような活動を支えていくのにいくつか鍵があると思いますが、学校活動ですので学校に特化するかもしれませんが、学校図書館の利用が非常に大事だと思います。知的好奇心の出会いが一番大きいのが文献であり、雑誌も含めて図鑑や物語が必要になってくるかと思います。学校によっては、すでに物語だけでなく色々なジャンルを学校図書館に用意しているので、そういう面で目に触れた知識や環境を整えていく。

もう一つは先ほど話もあったのですが、教職員自身の実体験をいかに伝えていくのか、教職員自身がどういう体験をしていくかというのは大事になってきます。幸い今、山梨県においても市町村においても、多種多様な方が学校に関わる環境を整えてくれています。学級担任のみならず様々な教職員が関わって子どもたちと触れ合う中で、授業以外でも自分の体験や失敗談を語る場面や感じ合う、共感し合う場面が生まれることで体験に繋がっていくのではないかと思います。

さらにもう一つは、自分の思いや言葉が実現していく達成感。子どもの権利条約や意見表明権も出されていますが、ただ表明するだけではなくその表明されたことが、学校現場の中だけでなく社会に貢献する、自分の言葉や行動が社会を動かすという体験ができると、まさに大きな成功体験になっていくのかなと思います。ただ学校現場ですので、スモールステップで様々な体験を構築していくことが大事だと思います。いきなり海外に行っても多分できることは限られています。小学校から積み重なってきたものによって、改めて様々な体験をすることで感じ得ること、知り得ること、自

分に挑戦できることが見つけられると思っています。すべての子どもたちに出番と居場所ができる環境を整えることができるのが学校だと思っていますので、そういったところで学校の役割というのは非常に大きいと思っております。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。  
それでは石川さんお願いします。

#### ■石川様

山梨県高等学校障害児学校教職員組合の石川と申します。私の所属する組合というのは公立の高等学校、それから特別支援学校の先生方の組合です。その立場から、すでに発言された皆様との重なるのないところで話をさせてください。

体験ですが、これは学校の内外を問わず仲間と心に残る感動を持って、ある程度自由に、或いは自主的に企画を練るところから作り上げていく過程が大切だと思っています。教育長からは高校ではインターンシップとか職場体験、留学、コラボ商品の開発等々のお話がありましたが、そういったことを教員が設定する場面も当然あるのですが、本人の意思や気持ち、僕はこういうことはしたいというのを丁寧に聞き取りする中で形にしていくという、ゆとりを持った取り組みが必要ではないかなと思います。高校になると机上学習、知識の習得がメインになって、なかなか体験する時間や質が限られてくるので、一つ一つの質が大切になるのかなと思います。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。今5人の方からお話をいただきました。いくつかキーワードが出てきたと思います。成功体験の話、仲間との協働、心に残る、或いは動かす体験が必要というところですが、何か補足やご意見があればお願いします。

#### ■原様

1つ言い忘れたことがあるのですが、学校現場でできることというのが、その体験の場を用意すること、体験した後に振り返ることができることが、学校の大きなところかなと思います。体験したこと、感じたこと、見てきたことをしっかり振り返って、しかも言語化する。言語化することによってしっかりと知識としての定着も習得も、自分が好きだという自覚も含めて、得意だと自覚できるというのが、学校現場ではできるのかなと。時間をかけられるところが学校現場の強みと思っていますので、成功体験をさせた上で、更に先を見せることが学校現場では必要で、それができる環境だと思っています。

#### ■鈴木様

私立の幼稚園の団体の会長を16年やっています鈴木と申します。

ここまでの話を聞いて、学校に関わる先生方の印象が変わってきていると思いました。今、幼稚園と言っても半分以上は認定こども園、幼稚園、保育園、それから子育て支援等々やっている園です。その中で保幼少の連携を長くやってきて、架け橋プログラム、ここでは子どもたち優先、就学前の子どもたちが小学校に入ってからなかなかうまくいってない現状があるからですが、長くやってきたにもかかわらずなかなか成果があがらない。むしろ様々な不登校とかいじめとか、子どもの育ちの問題がどんどん出てきている現状の中での架け橋プログラム、新たな保幼少の連携が進もうとしています。その中で、今まではどちらかというと学校の側から 45 分座っていられる子を育てて欲しいとか、要するに扱いやすい子どもを育てることを比較的求められてきた気がしていました。でも今のお話を聞いていると、むしろ自己決定であるとか、色々なことを自分からやっていくこと、それから色々なことを学校側・先生方が肯定的に見て下さるとか、かつて私たちに要求されていたことと随分違ってきていると感じています。今日の私の話の中に含みますが、幼児教育・保育が今何を求められているかというまさにお話しになった幼児教育・保育の中の子どものスタートの時点、育ちのスタートの時点からそういう保育が今求められています。また後でお話しさせていただきますが、それが今のお話と繋がるとすれば保幼少の連携は本当にこれから実を結ぶ形になると期待をしたところです。ありがとうございました。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは伊藤先生お願いします。

#### ■伊藤様

山梨県私学教育振興会、高校部門の伊藤と申します。

幼稚園の方は鈴木先生、そして小中の方は小西先生の方にはお願いしますが、今までの発表をお聞きして、教育長それから高等学校校長会の会長のお話そのものだと思います。私の高校とすれば、やはり高校というのは子どもと大人の間地点で、高校を過ぎれば大人となるということなので、どういったきっかけ作りというよりも、いかに素養を伸ばしてあげるか、自分の好きなことを今までの経験から見つけて、将来の社会貢献へどう合わせていくかということだと思います。そういう中で、色々先ほどのものをお聞きしたところ、同じようなことを考えているなということは出てきます。ですからこの子どもの好きや得意を伸ばす場のきっかけは小学校、そしてそれを更に練る中学校、そこが非常に大切だろうと。そして最終的に高校でそれをまとめ上げるということになるのではないのでしょうか。つい数日前にマレーシアから研修団が帰って参りました。色々な経験をさせてやるのが僕の信条で、その経験も良い経験だけではなく、少し問題になった経験というのもこれは大人になって非常に重要になってくると思います。ですからどんな経験でも良いから経験しようということをよく話しています。そんなところで行っているわけですがけれども、内容的なものは教育長それ



から校長会会長がおっしゃった、例えばコラボなど、子どもたちにとって良い経験となるということで非常に大切なものだと思いますので、今後もそれをどんどん増やしていきたいと思います。

それから最後に一つ、通信制の高校を持っていますが通信制の場合には金曜日に授業は一切しません。私どもの通信制は登校型の通信制なのですが、授業はしません。毎週金曜日には外部の講師に来ていただいたり、それは弁護士であったり、色々な各界の著名な方に来ていただくのですけれども、もう一つは例えば通信制の校舎は川沿いにあるので、そこでサッカーや色々な体験をさせて、自分が一体何に合っているのか、何をしたいのか、何が好きなのかということ幅広い視野から検討してもらう、見てもらう、経験してもらうということをしています。それは私どもの特色になっていますが、いずれにしましても高校というのはそういうところではないかなと、まとめ上げるところではないかなと思っています。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは小西さんお願いします。

#### ■小西様

私学教育振興会小中の担当として参りました駿台甲府小学校の小西と申します。お願いいたします。

先ほどからもお話にあるように、ほぼ私学としても今、お話にあった中から大きく変わるところではなくて、子どもたちの達成感とか連帯感、このようなものがいつの日か蘇って来るときに、あの時のことがきっかけだったとかある程度自分の道筋を決めた時に、あれが強い印象だったとかになるのではないかなと思います。そのため環境づくりがまず一つ大切で、その環境づくりは体験の場を与えるだけではなく体験したことを大人がどうだったか聞くとか、その過程として子どもたちそれぞれの多様性があるので、その子たちそれぞれを認めてあげるとか、大人も一緒に楽しむことも一つの環境づくりではないかと考えます。私も長く私学・公立に勤務したことがありますが、以前より色々な考え方や環境を持った子どもたちが多いです。そうした時、それぞれの子に対応していく時間と教員の指導力がその子たちの未来、好き嫌いを嫌いから得意にし、良い環境に整えていくことができるのではないかと考えています。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは鈴木先生お願いします。

#### ■鈴木様

先ほど話したように幼稚園、認定こども園の代表の立場から意見を述べさせていただきます。

本日の議題の議論をする前にその前提の子ども育ちについて、どうしても触れざるを得ないということで、昨年も皆さんにお渡ししたと思いますが、この「はじめの 100 ヶ月の育ちビジョン」というのをお手元に用意させていただいていますので、それを見ながらお話をします。まずこの「はじめの 100 ヶ月の育ちビジョン」を、今日初めて見た方ももしかするといえるかもしれません。これは一昨年 4 月に創設されたこども家庭庁が、その年の 12 月に子ども大綱とともに閣議決定し作成されたものです。はじめの 100 ヶ月とは、妊娠期から小学校入学までの概ね 100 ヶ月を指します。ページをめくった右上に well-being という今の一つの流行り言葉というかキーワードが出ていますが、色々な意味で人の幸福な状態を指すわけです。でも大人になってからの幸福は、価値観や宗教や民族等様々に違いがあります。それで良いわけですが、はじめの 100 ヶ月の well-being は全ての人に共通しているのがこの 100 ヶ月の育ちビジョンのテーマです。もう 1 枚めくっていただき左下の「子ども基本法を踏まえて権利や尊厳を守る」の 3 つ目を見て下さい。乳幼児の思いや願いを尊重する、先ほど小中高のお話の中に含まれましたが子どもの声を聞くということです。子どもの願いを聞く、子どもの声を聞く。例えば 0 歳の生まれたばかりの赤ちゃんでもそこに願いがあるわけです。それにいちいち応えていく、求めに応えていくことで愛着といいますかアタッチメントと呼ばれるものが育っていくわけです。そして 0、1、2 歳ぐらいでアタッチメントがほぼ育つ。言い換えるとアタッチメントとは安心感です。動物として生まれた子どもが安心感、人の中で育つこと、人と接することによって安心できるということを身につける。これがアタッチメントと言われていますが、これは安心感が十分育むことで 3 歳からの集団教育である幼児教育、これは保育園でも幼稚園でもそうですが可能になるわけです。もし安心感が育たないで集団になったらどうなりますか。大変なことになるわけです。幼児教育はそういう意味では園での保育者が意図的に準備した魅力的な環境。これはものであったり人であったり自然であったりするわけですが、その中から子どもが自らの意思で主体的に関わる、言い換えると遊ぶということ、主体的に遊びを選ぶことで成り立っているのが幼児教育です。子どもは自ら主体的に選んだ遊びを徹底的に遊び込むことが大切だと言われています。例えば探究であるとか主体的であるとか、自己肯定感であるとか、そういうことは共通していると思いませんか。この根っこが実は 0、1、2 歳からよく就学前までに育つのです。こうした体制の中で非認知能力の基礎、自己肯定感や自己有能感、それから好奇心、我慢する力等々生きるために必要な力です。これが幼児期にこそ育まれると言えるのです。

今多くの就学後の問題を前提にしながら、多くの園で保育の見直しが始まっています。かつては幼稚園・保育園では早期教育とか色々な余計なことをいっぱいやってきてしまったのです。その反省から多くの園で保育の見直し、子どもの本当に育つべきもの、これ幼稚園教育要領や保育書指針の中に 2000 年から書かれていることです。

それが現場でできていなかった。そしてまた、それに加えて知事が何年も前から提唱されているように、私の園では自然保育を親子活動の中でやっています。その中で愛するパパやママたちと一緒に、自然の中に入ってその自然の不思議さに出会ったり一緒に感動したり、そこで楽しむことを一緒にすることで生きる喜びを親子で感じる、そんな機会を今提供するようにしています。幼稚園・保育園、認定こども園、就学前にそういうことが求められているのです。

それから放課後の居場所ということで学童とか放課後等デイサービスが保育園や認定こども園、幼稚園でもできるようになってきています。その中で放課後の居場所です。特に小学生ですが、学校だけで子どもが育っているわけではないのです。今放課後の居場所が本当に問題になっています。ぜひこのことも色々な体験や自己肯定感を育める体験ができる場が、ぜひ整えられたらいいなと願っています。以上です。

## ■長崎知事

引き続きまして、加藤さんお願いします。

## ■加藤様

保育園と認定こども園の公立私立が集まる山梨県保育協議会の副会長で、甲府市で保育園を営んでおります加藤と申します。よろしくお願いいたします。

先日、中学生の卒園児が当園に職場体験に訪れまして、覚えている？と聞いたら全然覚えてないと言われました。保育園というのは0歳から5歳の記憶に残りづらいような時期のお子さんをお預かりしております。ただ小さな頃の経験でもその積み重ねが、いずれ小学校、中学校に行ったときの好奇心とか興味の礎になっていくのだと心に思いながら保育を日々行っております。好きというテーマを見た時に0歳からこの布のおもちゃが好きとか、つるつるしたものが好きとか好みはあるのですが、だいたい1歳ぐらいから自分は何が好きというのが芽生えてきます。2歳ごろにはそれが魔の2歳時のイヤイヤ期に繋がってくるのですが、子どもが好きという子どもの心の中の琴線に触れるというのはポジティブな雰囲気、アプローチとか、あと物的人的環境づくりがすごく大事な要素だと思っています。例えば甲府市では未就園児を対象にした子育て支援センターが15ヶ所あったり、地域の子育て課というのが居場所になって子どもの経験を広げるというような活動をしていたり、保育園でも例えば芋掘りやトマトの栽培とか自然体験をカリキュラムの中に取り入れています。自然体験の何が良いてトマトが腐ったりするとがっかりしますが、がっかりする経験は自然がやっても良いですが、人がやったら少しまずい、不適切かなと今のご時世はなっているので、そういう自然の経験とか体験は皆に平等というところで結構取り入れている園が多いと伺っております。当園でもやっております。そうした経験ができる場やチャンスを作るのはやはり子どもを育む側、保育所も幼稚園も小学校も、それからずっと高校まで色々な経験ができる場を作るのは、やはりそういう子どもたちを育てている側の責任だとも思いますし、役割だとも思います。

あとは子どもの得意をまず受けとめて、良いねと言ってあげて、私たちは5歳までですが、小学校、中学校と継続していくのは保護者、親の方だと思います。だから親を巻き込んだ取り組みはすごく大事になってくると思います。保育園というのは働く保護者のお子様をお預かりしますが、近年の保護者を見ていると、もう子どもに目を向ける余裕もないくらい忙しい。子ども自身も朝の7時から夜の7時まで保育所に預けられて帰ってご飯を食べて寝るだけみたいな、親子の触れ合いが本当に少なくなっているのが分かります。前はおじいちゃんおばあちゃんや親戚が近くにいたから、そこをカバーできましたが、単体の世帯が多くなってくるとその時間をどうやって作っていくか、親が子どもに目を向けていく時間をどう作っていくかというのも今後の課題となると思います。

最後に効果的な提供の仕方ですが、少子化が進んで県内の各保育所も定員割れが生じてきているので、その保育という子どもを育む場だったところが、もし空きがあれば今後色々な事業が子育てに関する事業の中心地になるような複合的な活用の仕方ができるのではないかなというのは少し考えていただきたいなと思います。

#### ■長崎知事

それはもう少し具体的にお話ししたらどういふ感じですか。

#### ■加藤様

例えば子どもが数名いると、保育者はそこにいなきゃならないのですが、園長先生がいて主任先生がいて保育士さんがいて、それだけ大人の力がいたなら、例えば子どもがそこで4人保育するとなったときにもっと何かできないかなと。例えば運動場があるから地域に開放するとか、小学校の子どもたちの遊び場で大人の目のあるところで遊ばせるとか、地域の子育て家庭の寄り合いの場所にするとか、そういう面で色々なことができるのではないかと考えております。

#### ■長崎知事

ありがとうございます。

それではオンリーワンの日向さんお願いします。

#### ■日向様

フリースクールオンリーワンの日向と申します。よろしくお願いします。先ほど山梨県の高等学校・障害児学校教職員組合の石川先生の方からちょっと話があったので、そちらの内容と重なってしまうところがあるかと思いますが、少しお話をしたいと思います。

子どもの好きや得意を伸ばす場やきっかけの作り方、効果的な決定の仕方についてです。石川先生からお話があった、学校内外を問わずに子どもたちが練るところから活動として行うというお話で、そこに関してはすごく大切なことと思っています。例

えば、大人・先生方が決めているもの、運動会や様々な行事もそうですが、その中で子どもたちが参加して行う集団活動、集団行動も大事だとは思いますが、しかし、子どもたちでしっかり話し合いを行い、これをやりたい、こういうことにチャレンジしてみたいという話ができるのは良いと思っています。例えば、小学校高学年だけではなくて低学年から皆で話し合ったりして協働の力に繋げることができればベストだと思います。そのため子どもたちが主体となり活動をする必要があるというのがまとめですが、主体的な学びをするためにどうしたら良いかとなった時に、先生方は本当にご多忙で、今以上にイベント行事を増やすことは難しいと思います。その時に地域の企業と連携をとり、その企業の良さを活かしてもらいながらイベント活動を行うことがより良いと考えられます。子どもたちがこれをやりたい、これをやるためにはどの企業と繋がれたらその活動が行えるかと案を挙げていきます。そうすると先生方の負担なども減り、また子どもたちが企業と繋がることでその企業の良さを感ずることができ、山梨の将来を担う人材育成にも繋がるかと思っています。私の同級生も山梨から東京の方に出ていますが、これから先のことを考えた時に山梨の良さを生かせるような企業との連携をもう少しできていければと思います。企業でイベント開催をしてくれているところもありますが、例えば、中小企業ですと費用面の問題でイベント開催ができない事も多いので、補助制度も検討できたら良いかなと思っています。先日、すごく良い活動と思ったのが地元企業とのコラボ商品開発で桃花台学園のコラボ商品です。コラボ商品開発に関わった子どもたちが大人になった時に、私たちはこの商品を作ったのだと言える、本当に良い体験活動だと思いました。そのため、今後、より企業との繋がりを持ち、様々なイベント活動を子どもたち主体でできるような仕組みができればと思います。またそのためには企業への補助制度等が必要かと思っています。以上となります。

#### ■長崎知事

ありがとうございます。

親子や大人との協働が1つキーワードだったように思いますが、何か補足などあればお願いします。

#### ■村上様

地域も大人も含めてということで、私も常々なにか子どもたちが活躍できる場や、好きなことで生かせる場はないか、何かできないかなと考えていたところです。この前あるテレビでお金ではなく活動時間で考える時間銀行というものがあることを知りました。それは、例えば、私が、草刈りが得意で近所のおじいちゃんの草を30分刈って、おじいちゃんが代わりに得意な将棋を30分教えてくれるとか、色々な地域の人が、自分ができそうなものをお互いに持ち寄って、お金ではなく、利害でもなく、自分たちができることを皆で協力して街を盛り上げていこうという考え方です。ヨーロッパの中にもあるそうです。それを聞いて思ったのが、高校生とかすごく力がある

子どもたちが、ちょっとお年寄りにはできない大きな物を運んだり、或いは子どもでも近所のお買い物の代わりをやってあげたりして、その代わりにおじいちゃんおばあちゃんが、お父さんとお母さんは用事があり、どうしても代わりがいないので、その家へ行って少しだけ預かってもらう。このようなお互いができる一つ一つを工夫していけば、色々と広がっていくのかなと、常々考えているところです。今ちょうど子どもたちが主体にという話を聞きましたので発表させていただきました。

#### ■長崎知事

県ではデジタルの技術を使っています。それはたまたまですが、基本的にはプロジェクトベースドラッシングと言うのでしょうか。小学校・中学校・高校・大学で、中学生だったら身の回りのこと、高校生だったら学校のこと、大学生だったらある地域の課題解決にデジタル技術を使ってとかホームページを使って、その課題解決について取り組みましょうということを、メンターが教えながらやっているのですが、そういう体験とかどうですか。やはり地域に貢献することで、さっきのお話もありますが、仲間と力を合わせて、なおかつできる範囲の貢献があって大人からありがたいと評価をされると。そういう機会を少し充実させるという方向性はあるかについてはどう思われますか。

#### ■村上様

すぐにパッとできるかというとなかなか難しい点もあるかもしれませんが、例えば学校は今、コミュニティスクールがだいぶ充実してきて、地域とすごく関わりが増えてきています。お年寄りでスマホが全然使えないが、中学生に聞いたら一発で分かり、その中学生も普段はあまり活躍しない子がスマホの教え方だったらもう生き生きとして教え、おじいちゃんおばちゃんが喜んだという話を聞きました。それをきっかけに、やはり人と人が触れ合うことで、その地域の子どもたちと地域が広がっていくということがあるかと思います。だから今、知事さんがおっしゃるようにデジタルの部分も含めながら色々な子どもたちができるもの或いは大人ができるものをお互いに共有し合っていくことができれば、私は良いかなとは思っています。

#### ■長崎知事

大人との共有ですね。幼児教育の世界だと大人と共に楽しむとお話しいただきましたが、どういう感じで達成感を上げていますでしょうか。

#### ■鈴木様

保護者、パパやママ達と一緒に土曜日、月1回任意でそういう活動をしています。山梨で育ったパパやママたちは、住んでいるお家の裏は裏山で、すぐそこに川があるのに子どもの頃、実は自然の中でそんなに遊んでいないです。知事さんから自然体験の指導者認証（山梨県自然保育導入推進アドバイザー）を受けている副園長が指導し

て、園のすぐ近くの里山で遊びます。ほぼ同じ場所でも毎月違いがあり、季節によって変わっていく中で自然の不思議さに出会い、遊具もないところで遊べるわけです。そういう親子と一緒に感動したり楽しんだりという喜びがそこにあって、子ども同士は友達ですが、普段あまり交流のない親同士の交流もできたり、ある意味幼稚園や保育園の持っている共同体というか可能性ができます。これが最初のころはなかなか定着しなかったのですが、20年続けていたら今は参加者が多くて、小学校3年生まで参加可能ですが、午前と午後の二部制にしています。

あともう一つはやはり地域の里山でやることに意味があって、例えばトイレは里山のすぐそばに自治会館があって、そのトイレを借ります。いつもその自治会館を管理している方に鍵を借りて行きますが、地域の自治会の色々な方々のお世話になっていますが、皆さん喜んでやってくれます。もう一つ、例えば7月にそうめん流しをしますが、その地域の竹林へ親子で行って、竹を切って、割って、節を抜いて、樋を作って、そうめんを流して、自分たちで作った竹のお椀と箸で食べる。そこまでやっただけの自然体験ですが、竹林も地域の方のところに行ってお願いをして竹を切らせてもらい、地域の方は竹を切ってもらえてありがたいと喜んでもらえます。そういう様々な関係性もできてきます。そんな中で色々な可能性があると思っていて、今は小学校3年生までですが、6年生ぐらいまで続けさせてほしいと要望がたくさん出ています。

## ■加藤様

働く保護者さんのお子様を預かっているのも、なかなか皆で集まってというイベントは年3回ぐらい、児童会とか発表会ぐらいしかできないですが、クラス単位になると多少は動きやすいので、うちではクラス単位で親子活動という、親子で一緒にトマトを植え育てています。実がなるまでは園でお預かりしているのですが、実がなったら家に持ち帰り、そこから親子でクッキングということをはじめています。また、今お便り機能と言って写真とか、こういう活動をしましたというのをスマホで保護者さんたちに送るようにしていて、日々の活動が目に見えるようになったと言うことで、だいぶ保護者さんたちの受けとめ方が変わってきて、「参加しよう」、「もっと知りたい」となってきたと思います。忙しいからそれぐらいしかできないですが、やはり親を巻き込んで、親が遊び方を知らず子どもへの関わり方を知らないから、買い物行くときにうるさいからスマホを見せておくとか、ベビーカーに乗せておくとかいうのではなく、「このトマトが美味しそうだね」といった親子の関わり方に変えていきたいという思いがあります。先生方も一生懸命やって発信もしていらっしゃるのもよく分かりますけど、やっぱり今の世代の親に届くような形で、子どもたちが今何を考えたり何が楽しいのかを発信していくというのも必要ですし、それをもう少し地域に広げたりしていければと思っています。

## ■長崎知事

親御さんの代表でPTAの依田さん、よろしくお願いいたします。

## ■依田様

県 PTA 協議会会長の依田と申します。よろしくお願いいたします。議論が非常に深まってきて、親の大切さというのがやはり一つあるだろうと思います。PTA 協議会ということで、教職員と保護者からなる団体で 5 万人ぐらい会員はいるのですが、児童生徒合わせれば 10 万人ぐらいの組織にはなります。6 点ほど考えてきたことがありますので、手短に発表させていただければと思います。

まず 1 つ目がローカルモデル、こうなりたい人との直接的な交流という視点が挙げられるかと思っています。県 PTA 協議会ではここ 2 年間、7 本指のピアニストとして有名な西川悟平さんを招いた講演会を開催しています。西川さんのよう困難を乗り越えて成功を収めた人物と直接お話ができる機会を子どもたちに提供するということは非常に大きな刺激となって、子どもたちも非常に大きな刺激が得られているかと思っています。そうした成功体験を持つ方から言葉とかエピソードを聞くことで、子どもたちも、自分もできるという自信が得られ、夢を諦めずに挑戦し続ける大切さを学ぶきっかけになっていると思います。

2 つ目が成功体験の提供です。子どもたちに成功体験を積ませることが、自信や自己肯定感を高めることに非常に重要であると考えています。成功体験は必ずしも、大きな成果を指すわけではなく、小さな成功を積み重ねることが、後の大きな成果に繋がるとしています。自分自身を振り返っても自転車や鉄棒の逆上がりや跳び箱など 1 回成功すると何故か次々に自然とそれができる。またその次へのステップに繋がるということで、そうした自信を育むことに繋がるのかなと考えます。

3 つ目は多様な体験の提供です。子どもたちは様々な分野で自分の得意を見つける可能性があると思います。1 つの分野に限定することなく、多様な体験の機会を提供することが大切かなと思います。芸術・音楽・スポーツ・科学・文化など、様々な異なるジャンルの中でワークショップやイベントを開催することで、子どもたちが自分の好きというものを発見する手助けができるのかなと思います。また山梨県で言えば、ある地域で少人数ということもありますが、集団競技ができない状況があればそこに対して支援するというのも大切かなと思います。

4 つ目ですが、失敗を恐れない環境づくりという視点です。失敗から学ぶという考えは、子どもたちの成長には欠かせないと思います。失敗を経験することで問題解決能力や忍耐力を養うことができると思います。子ども達が失敗を恐れず成長し続けるためには、周囲の大人がその過程を肯定的に受け入れる環境を作ることが大切かと思っています。

5 つ目ですが、先ほど原委員長からもありましたが、継続的なサポートとフィードバックという視点です。子どもたちが自分の好きや得意を深めていくためには、継続的なサポートが必要だと思います。定期的なフィードバックや励ましを通じて、子どもたちが成長を実感できるようサポートをすることが大切かと思っています。ワークショップやその活動の後にフィードバックを行って子どもたちの進捗、またこの状況を把



握する中で次へのステップに繋がる、励みになるようサポートをすることが大切かと思っています。言語化することで状況を見極めることが必要であると思っています。

最後6つ目ですが、子ども同士の刺激という視点があると思います。子どもたちは他の子どもと交流してともに学ぶということが多くを得ることができていると思います。当然先生との交流も大切ですが、子ども同士の刺激という視点で、友達との切磋琢磨やモチベーションを高める、競争心を得る中で自分も努力するということが大切かと思っています。定期的なグループでの活動、競技を通じて子どもたちが互いに影響し合って共に成長できる場を提供する必要があるかと思っています。

最後に一つ、今年度、教育委員会に後援していただいて県PTA協議会として映画小学校ということで3つの会場で上映する予定です。この映画は小さい頃、当たり前に行っていた掃除や給食当番、また学びのルール、そのような体験を通じてすばらしい人間性が育成されるということを訴える映画ですが、今年度そうした取り組みも、PTA協議会としてさせていただくのですが、子どもたちが自分の得意分野を発見して更にそれを伸ばしていける環境を作ることが大切であろうかと思っています。またPTAとしても支援させていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

## ■長崎知事

次に高相さんお願いします。

## ■高相様

高等学校PTA連合会会長を務めております高相と申します。甲府一高に娘が通っておりまして今3年生ですが、甲府一高のPTA会長をしております。高校ですので伊藤先生の言葉を借りれば、まとめの段階でしかも3年生ですので、もう進路もだいたい見えてきて、どういった分野に進みたいか、働き方まで見据えてどういった進学をしていきたいか、周りの生徒を見ても決まってきたところなんです。しかも、もうラストスパートというところにきていますので、子どもたちがどんな夢や希望を育むためにこれまで培ってきたか、養ってきたか、そういった視点から少しお話しをさせていただければと思います。

まずは生徒たちの日頃の学びの場を先生方には非常に手厚くご提供いただきまして、今お話を伺っていても今の子どもたちは本当に幸せだなと、本当に一人ひとりを大切にしてくれるなど、保護者としても感謝したいと思っています。小・中学校ぐらいに遡ってみると、日常の多くの時間を学校で過ごしていますので、その学校の中でどういう行事があったかとなると、やはり特殊な行事の社会科見学や修学旅行というのは印象に残りますし、また普段の授業でも答えが分かった瞬間、或いは評価された経験、こういうものは子どもたち一人ひとりにとって見れば小さな成功として結びつけられると思います。そんな小さな気づきや成功の積み重ねが「これが好き」、「これは得意」という気持ちを育てているのではないかと思います。特に中学、それから高校で行われる職業体験、或いはインターンシップという、実際に自分たちが学校から外の

社会に出て大人たちはどういう活動しているのか、その現場を生で見ることに、働くことはどういうことか、或いはその報酬を得るとはどういうことか、人から信頼されてお仕事をもらうとはどういうことか、こういうものを体験できるということは、非常に良い経験が蓄積されているのではないかなと思っています。私自身も山梨県の設計事務所に所属していますが、「建築設計を志したい」、「建築設計をやってみたい」という目標が明確な中学生や高校生が実際に会社に来て、2日間・3日間で体験していただく場面があるのですが、私たちが初心にかえらされる、純粋な気持ちで建築に携わりたい、そんな気持ちを私たち社会人としても改めて振りかえさせてもらえる、お互いにとっての良い経験を積ませてもらっていると思っています。

家庭ですが、小さい頃から習い事、或いは家族旅行の経験から、関心を広げる機会も多くあるのですが、親としては子どものやりたい希望に寄り添って機会を与えていきたいというふうに思ってやって参りました。それが結果として進路や夢を考えるきっかけになったのではないかなと思っています。実際、娘が高校1年生の時に留学をさせてもらい、海外での生活の経験を踏まえて、海外の良いところ、或いは逆に日本はこういうところが良いのかということを経験を踏まえて世界が広がったのではないかなと思っています。

また地域に目を向けると、近い大人だけではなく近所のお兄ちゃんやお姉ちゃん、或いは大人から地域行事の指導を受けるなど、地域の皆で地元の子どもたちを育てようという大人たちの温かい愛情を受けることができるので、地域の先輩に育ててもらっている意識も芽生えるのではないかなと思っています。こうした学校や家庭、地域での体験の積み重ねが、高校での進路実現に向けた目標の設定、或いは取り組む姿勢といったものになっているのではないかなと実感しています。以上です。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

## ■荻野教育長

いくつかお話を聞いていて、なるほどと思うことばかりでしたが、2、3最近の体験も踏まえてお話しをさせていただきます。

先ほどたくさんの先生がトライする機会を与えることが大切とおっしゃっていましたが、今週、東京で部活動の地域展開としてスポーツ庁主催のフォーラムがあり、そこでバレーの益子直美さんがお話しをされていたのですが、彼女は怒らない大会、監督は怒ってはいけないというバレーボール大会を10年ぐらいやっています。トライする機会を与えるということは、要するに子どもたちがトライできる、逆に言うと失敗しても良いのだという環境であり、一番大きな決め事は、例えばマナー違反や危険なことがあれば怒って良いが、ただプレー中のミスは絶対怒ってはいけないという決まりだそうです。あまり上手くできなかったということは当然子どもだからありますが、それを怒ってしまうと萎縮してしまうという益子さん本人の体験からそのよう

な大会を行っているのだそうです。そういう監督の怒らない大会と一緒にやっている仲間から、最近では全国大会で優勝するチームが出てきたそうです。怒らなくても日本一になりましたという話を聞いて、子どもたちがトライできる環境作りを大人がしなければならないのかなと思いました。

それからもう一つ、山梨科学アカデミーが 30 周年を迎えて、その記念パーティーがあり、大村先生がご講演されるというので参加しました。そのあとレセプションがあり、かつて山梨科学アカデミーで色々な賞を取った子たちで、そのまま研究者になった子たちを呼んで、今どんな研究をしているのかという講演がありました。若手の 20 代後半ぐらいのまだ助教ぐらいの子たちですが、たまたま私の教え子だったということもあり、レセプションのときに話を聞いたら、1 人の子はパラボラアンテナの設計を研究しているそうです。パラボラアンテナは、お椀型がうまく維持できないことがあって、角度によって自分の重みでたわんでしまうそうです。それをどう制御するかという非常に難しい研究をされているのですが、そのきっかけは何なのかと言ったら、高校時代の SSH の研修だったのです。野辺山のパラボラアンテナを見に行き、あの大きさにもうすごく圧倒されて、「僕はこれを研究したい」と思ったそうです。その高校 1 年生の体験から、今その研究に入っている、つまりそういうことなのだなと思いました。もう 1 人は AI の研究をしている子で、どちらかというとな数学畑の子でもあったけど、その子は小学校の算数でやはり先生にできたことを褒められ、それで算数が好きになって、そこからずっと数学が好きだと言います。高校生が小さいかは分かりませんが、小さいころの実体験をもとに自分の夢というものを見つけて、それを実現している子たちだという事をその場で思いました。

あと自分が校長をしていた高校でも、探究活動の中で素敵な大人と出会って、その大人に導かれて、つまり学校の先生以外の大人に導かれて様々な活動に挑戦して、それを達成して達成感を得る、或いはそれを自分なりにアピールして大学受験に生かしたりする子どもたちもいます。コミュニティスクールもそうですが、教員が影響を与えられれば教員としては嬉しいですが、学校外の大人と出会うことで夢や達成感が育まれるケースや、色々な貴重な経験を得るケースがあります。やっぱり学校を開いていくということは大事なかなとその時に思いました。ありがとうございました。

## ■長崎知事

もう一つのテーマも全部合わせてご意見をいただいて、また色々やりとりできればと思います。次は、体験の質、現実とバーチャルのバランスのとり方、実体験の大切さを議題にしたいと思います。

## ■村上様

今朝少し時間がありましたので、庭の草を取っていたら蜂に刺されました。こんな草のところに蜂の巣があって、痛さや失敗する体験の中で学ぶことはたくさんあり、思い出深い体験になってしまいました。学校の先生たちは色々なところに子どもたち

を連れて行かなくてはならない中、先生方自身の経験がすごく大事で、そういう時に危機対応みたいなものも知っているだけでも大きいし、蜂に刺されたらある程度簡単な治療で済むとか病院行く必要もない等、生きて行くことは体験とか経験、知識の積み重ねだなと感じます。格差が学校現場であるかというのは、私もある程度は出てきているのではないかと感じます。親が豊かで子どもたちに色々やらせてあげられる家庭とそうでない家庭もあるかと思います。その中で学校では何ができるかは難しいですが、学校現場で教員をしている時に近くに山があるのに山に行かない、川があるのになぜ川で実物を見せないのだとよく言われました。色々な授業で忙しくて難しいし、危機管理もあるので様々なところへ連れて行くのが難しいのは承知ですが、実際に目の前で見ると、体験できる、触れる、聞く、或いは香りとして感じ五感を使えるものはできるだけ学校現場は生かしていく、その作業は必要ではないかと感じました。山梨県は知事さんはじめ教育委員会のおかげで全国に先駆けて少人数学級を始めて一人ひとりの教員が子どもたちに関われる時間が増えてきています。それをチャンス・プラスに捉えて、そういう機会をできるだけ子どもたちに与えることを皆が意識していくことが大事かなと感じました。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは田草川さんお願いいたします。

#### ■田草川様

体験の質、現実とバーチャルのバランスのとり方、実際に体験することの大切さというテーマのもと考えました。バーチャルを、ICT 機器等々を通した間接的な体験という大きな捉え方でお話ししますが、本校の子どもたちの様子を現実体験とバーチャル体験のどちらが多いかなと見ると、現実体験の方がまだ多いかなと思います。しかし学校も1人1台端末が普及して活用頻度が増えてきている、またスマホを子どもが持つようになって家庭でのスマホの時間が増えてきていることを考えると、今後急速にバーチャル体験が増えてくることは考えられます。これから子どもたちが社会を生きていく上で ICT 関連に関わるスキルは絶対必要になってくるので、バーチャル体験等々も十分に経験していく中で、上手に使っていくことは大事だと分かりますが、それと同時に現実体験でないと分からないものは体験させなくてはいけないので、そのバランスは学校教育の中でしっかり見て体験させることが大事だと感じます。小学校の5年生で自動車工場見学によく行っていました。実際行って現場で自動車をガチャガチャと組み立てて、火花が飛び散り、車ができていく課程を見るところを毎年行っていました。最近はやや予約も取れずスマホやタブレットで中継を見するという形で体験に変えてしまうことがあります。確かにそれで勉強はできますが、その場の空気や匂いや音というものは現場で見るとは違うので、あるところはバーチャルで、あるところは本物の体験として、教師が見極めていくことは大事かと思います。

経済的な格差では、学校生活で確認することはできないですが、家へ帰ってそれぞれの子どもが経済格差によって体験の差はどうかと見た時に、経済的にたくさん経験できている子もいればそうではない子もいるのが現実にあります。学校に来ている時にはそういうことが起きないよう、平等に皆が体験できることを常に心がけながら学校教育を行っていく必要があると改めて感じます。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは篠原さんお願いいたします。

#### ■篠原様

体験の質ですが、質も量もできるだけ多い方が良く考えています。成功体験はとても大事だと思いますが失敗する経験も必要だと思いますので、質も量もここは必要と考えております。現実とバーチャルのバランスですが、バーチャルの捉え方が違うかもしれませんが、デジタル機器、ICT 機器を活用する強みもあると思います。情報を収集する意味では、瞬時にたくさんのデータが集まるので活用すべきだと思います。しかし現実の体験は自分で見て感じて考えることが必要だと思います。学校現場においては、例えば ICT 機器を使って調べたことをフィールドワークや実験で検証する、両者の良さを体験させることが必要かと思います。見極めというお話がありましたが、教員による「これはデジタルが有効、ここは実際に体験させたい」という見極めは必要だと思います。また生徒自身がバーチャルに多く偏っているようには今は感じていませんが、今後どうなっていくのかはわからないと思います。実際に体験することは大切ですし、心を動かす体験が不可欠だと思います。多くの体験が自分の糧となり実となり、仕事や未来に繋がっていくと感じております。また学校において体験の部分では格差が当然生じないように考えており、体験を希望する全ての生徒はその機会に均等であることが望ましいと考えます。1 点すごく悩むことがありまして、働き方改革で色々な行事を毎年考えますが、行事を無くしていくことはなかなか難しいと思います。やはり多くの経験・体験を生徒たちにさせることは学校の間では大切なので、何かを減らすのは生徒たちのマイナスになると考えますので、何とか教育の質を低下させないよう色々な行事のあり方等含めて今後も生徒のために体験の機会を作っていきたいと考えております。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。悩ましい問題です。

それでは県教職員組合の原さん、お願いいたします。

#### ■原様

働き方改革では行事もそうですし、一番は子どもたちにとって何が有用か考えない

といけないと思いますので、体験活動を充実させながら教職員にとっても実りややりがいある職場環境を作ることが前提として大事だと思います。バーチャルと実体験というところで、子どもたちはすでにゲームや動画、SNS も含めてバーチャル世界へのアクセスがしやすくなっており、一時期より間違いなく多くのことがバーチャルの中で培われていると思います。それを補填しているのが、家庭では旅行やたわいない会話、一緒にご飯を作る等であり、学校では運動会、修学旅行等の実体験かだと思います。そのバランスをしっかりと取ることが大事だと思いますし、スモールステップの中では一番バーチャルがやりやすいと思います。実際行けない場所にバーチャルで体験して、自分でコースを決めて、実際に行き深めることができる。修学旅行の事前学習などの活用になると思います。

もう1点、バーチャルとは違うかもしれませんが、本の世界や図鑑も子どもたちが目にするものとしては大きなもので、知識を得て興味を持って実際に行ってみようというものが生まれる。それが小中学校ではかなわなくても、生涯学習の中できっかけがあれば、大人や社会人になってからの経験に繋がると思います。私も小学校の時に読んだ図鑑や世界の雑誌でピラミッドやナスカの地上絵を見て、行きたいなと思い、1回も行けていませんが、その経験があるから行ってみたいと思い、夢を持てるので、すごく大事だと思います。

経済格差により体験が左右されるかというのは、すごく大きいと思います。家族旅行の話をしたましたが、経済的な関係で行ける場所と行けない場所が限られてしまうことがあります。自治体によって夏休み期間中、公共機関は子どもが無料だったり、山梨では博物館や県の施設は無料で行ける状況を作ったりしていますが、子どもたちの興味を持つところにアクセスしやすい状況を作っていただけるのはすごくありがたいです。学校として一番のネックは、子どもたちが興味を持つ施設が近くにないとバスを出さなければいけない。歩いていける範囲でない場合はバスを出さなければならない。バスを出すならばバス代がかかってしまうので、体験に関するアクセスや環境を整えることはすごく大事ななと思います。以上です。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは石川さんお願いします。

## ■石川様

もうすぐ夏休みが明けます。家庭での夏休みの様子の作文・報告を見ますと格差はあるなと思います。あそこも行った、ここも行った、こういうこともやったという報告・作文を書いて来る子もいれば、どこにも行けなかったという作文を書いてくる子もいます。それから、先ほど海外研修の話が出たと思いますが、海外研修も一定の自己負担が生じるために、すごく申し込みが殺到する高等学校もあれば、少し経済的に厳しい家庭が多いところでは申し込みは全然ないと言っている高校教員もおります。

修学旅行もごく稀に、費用面で苦労してようやく費用を捻出して行けたという生徒を受け持ったことがある担任も中にはいるようです。この夏休み期間中、各市町村の教育委員会や県の教育委員会で「やまなし少年海洋道中」の取り組みがあり、これは経済的な格差もありますが、情報格差もあり敏感な方はすぐ情報を得て申し込む方もいますが、全く知らないご家庭も多いと周りを見て思います。先ほどの話で、学校教育ではできるだけ格差を生じさせないことが原則の中で、高校段階になると直接的な体験が少なくなってくると思います。色々なことを学ぶ中で間接体験や模擬体験、或いは最近では ICT を使った体験型学習を活用する中で、できるだけ格差を埋めて誰もが平等に学びにアクセスできる環境が整うと良いと思っています。以上です

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは伊藤先生お願いします。

#### ■伊藤様

バーチャルの意味が一体どこまでを言っているのか。先ほど図鑑なども入るのであればという話でしたが、インターネットが増えている中、色々なところから ICT を駆使して得られる知識は、今後ますます増えると思います。これは不可欠で比重は変わってくると思います。そういう中で現実とはどういうものかと言うと、例えば、私は以前、会社を経営していましたが、色々な打ち合わせは電話やインターネットで行いますが、最終的に契約を結ぶ時は会って行いました。握手をして相手を見てどういう人間なのか、信用できるのかできないのかはインターネットではわかりません。ですから比重・バランスはその時の社会的構造によってであり、最終的には必ずアナログが残ると思うので、ここでバランスのとり方と言われても何とも言えません。ただ今後が増えると思います。皆さんも AI を使っていると思いますが、私も色々な書き物を AI でやります。自分でまず作っておいて、それを AI に投げるという形をとっていますので、バランス的にはすごく増えています。今後もっと増えると思います。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは小西さんお願いします。

#### ■小西様

バーチャルの捉え方を仮想空間というところなのか、教材として捉えるかというところで考えましたが、例えば1人でもできるし、友達とでもできる世界を作れるのは、子どもたちがコミュニケーションを取る良い方法だと思います。しかし AI 的な教材を使いこなしても、基本的に小学校の学びの基礎部分の書いて学ぶことは無くなるこ

とはないです。本校でも1年生からiPadを使って色々な写真を撮ったり、思い出や記録を残したりしていて、それは一人ひとりの取り組みとして認める部分であります。人としてどういう学びの基礎が必要かという部分は変わらず、読む・書くは今後、大切に考えていきたいです。AIやバーチャルはセキュリティの部分で大変難しい問題も多く、大人が見極めて子どもたちが上手に使いこなしていけるかということがこれからの大切なところであると考えています。費用面も関わってくるので色々な取り組みの中で、無料で使えるところを探しながら使っていますが、格差がないように使えれば大きな強みになるのではないかと考えます。

## ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは鈴木先生お願いします。

## ■鈴木様

保育の立場から、先に触れたはじめの100ヶ月育ちビジョン策定委員で、このビジョンの科学的裏付け・エビデンスを担当した明和昌子(京都大大学院)教授によれば、乳幼児期に関して言えば現実の体験が大事でそれ以外は必要ないだろうと、そこまで極論しています。例えばアタッチメントで言えば、産み落とされた何もできない小さな子どもがお腹をすかせた時に泣いて訴える、それに応じて抱き上げてお乳を飲ませる、そこに甘いお乳と温かい抱擁がある。その中で、アタッチメントの一番基礎の基礎が育ちます。まさに体験そのものではないでしょうか。機械やロボットでは代わりにならないです。それが最初の現実の体験であり、それ以降の非認知能力の育みというのも、自己肯定感であり好奇心、我慢する力等々、人と人との具体的な関わりの中で育つものです。そこに機械が代われるかと言ったら代われません。そんな意味で少なくとも私達の仕事で言うと、先生たちの働き方改革や子どもたちと親のやりとりの連絡調整にはICTを入れていますが、子どもたちとの保育には全く導入していません。

一方、格差の面ですが、保育料の無償化が進み、日常的な保育は格差が無くなったと言えます。誰でも3、4、5歳の保育を受けられます。ただ問題は、ハンディのある子どもたち、障害のある子どもたち、それから医療的ケア児、或いは不登校の子どもたちがどうかと言ったら、制度としては平等ですが、具体的には公平ではないです。甲府市にも多くの不登校の子どもたちを預かるところが3つほどあり、また学校にも少しずつそういうシステムができ始めています。経済的に余裕のある家庭はフリースクールに預けることができますが、経済的な負担ができない家庭は残念ながらフリースクール、或いは離れたところへ送っていくこともできない。子どもが家にいることで仕事を辞めざるをえない家庭もあると聞いています。そういう意味で社会は制度として平等だが公平ではない。要するにインクルーシブな社会にはまだまだなっていないと乳幼児の時から感じています。現に幼稚園・保育園、認定こども園に障害のある



子どもたちがなかなか入っていないです。問題は大きいです。体験の質の議論とずれるようですがそこだけは指摘しておきたいと思います。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは加藤さんお願いします。

#### ■加藤様

バーチャルで最初に思い浮かんだのは、2、3歳ぐらいにテレビで戦隊ものを見て、次の日に保育園で皆が赤レンジャーになって、赤レンジャー同士で戦うという光景です。昔からずっと続いているんですが、イメージの世界になりきり、入り込む体験をするのがバーチャルの入口かなと感じました。体験を積み重ねることが大事な時期なのでバーチャルは保育の場では本当にいらないです。そこから小学校、中学校に行く時に必要になってくるスキルで、教育の興味関心を広げる有用なツールだとは思いますが。ただYouTubeのお勧めに同じようなものが出てくるように、個人的な思考に陥りやすいので、情報を得た後に行動する、料理番組を見て作ってみたいと思って料理するなど、次に繋がるツールとしては有用かと思います。学校現場で動画等を見て、修学旅行に行き、二条城がこうだったと知識が深まるのは有用だと思います。実際に体験する中で感じた思いや友達と力を合わせた喜びは自分のものとして残っていくと思います。これはバーチャルでは無理だと思うので、バランスの取り方は大事だと思います。興味関心を広げるツールとして使いこなせたら良いと思います。

不登校の話が出ましたが、高校に入ったが不登校になったというお母さんが相談に来た時に、今は通信で高校卒業資格が取れるので、家から出たくないなら無理するのではなく、通信に切り換えたら心が軽くなるという話をしたら、角川ドワンゴ学園の通信部に入って高校を卒業したと言っていました。そのあとどうするか聞いたら、大学進学を目指し受験の準備をしていると言っており、立ち直った良い例でした。社会自体が忙しく色々な価値観がある中で、そういう面でも心を救うツールになるとその時感じました。

あと、格差に関しては絶対的に昔からあると思います。保育園でお盆の時期にどこへ行ったという絵を書かせることを昔はしていましたが、今はしておらず、子どもの好きな絵を書く中で、海に行った時の絵を書くなどあれば「そういう経験ができて良かったね」という関わりはしています。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。

それでは日向さんお願いします。

#### ■日向様

バーチャルについてお話しをさせていただきますが、バーチャルをスタート地点とするのは良いかと思います。なぜなら、不登校の子たちは本当はやってみたい、でも現実的にその場所に行ってみるのは少し怖い、ということが多々あります。バーチャルで体験することで興味が深まって、最終的にその場所に行けたという事例もあるので、バーチャルを活用することは良いと思います。また、子どもたちの視野を広げることに繋がるという点でも、バーチャルは良い取り組みかと思います。山梨県でもメタバース等色々を行っていますし、そちらで救われているお子さんも多くいると思います。ただ、バーチャルだけではなく、そのあと現実に関ることがベストだと思います。

次に、体験の機会が経済的な格差によって左右されるかということについては、その通りだと思います。家庭の収入次第で旅行先の違いや旅行に行けるか行けないか、また共働き世帯ですと子どもをあまり外に連れていけないご家庭もあります。住んでいる場所で公共交通機関の利用が難しく、体験活動があまりできないところもあります。私達の団体が活動しているのは大月市ですが、大月市の近隣である小菅村や丹波山村ですと、人口が少なく路線バスがほとんどない状態です。私が住んでいた都留市も今、路線バスはほとんどない状態です。ただ、私が中学生の時にはデマンドタクシーという制度があり、100円で市内を移動でき、また100円で利用できた事が良かったと思っています。バス等を子どもたちが体験活動する時に利用することは難しいですが、デマンドタクシー等を県などで補助していただければ、子どもたちは体験活動に参加しやすいと思います。保護者が仕事をしていて一緒に同伴できないこともあるので、地域の方やサポーター制度を導入して一緒に同伴していただくことで地域との繋がりも深まり、子どもたちにとって良い体験ができると思っています。

もう1点ですが、フリースクールについて、ご家庭が裕福でなければ利用ができないということは現実課題としてあります。山梨県ではフリースクールの補助制度が施行され、1万5000円、出席扱い認定・世帯なども対象が限られていますが、補助制度ができた事は大きいと思っています。こちらの制度について新聞掲載された後、私への問い合わせが増えました。条件に合致して利用できるご家庭は正直少ないですが、どういふご家庭が対象で利用できるのかというお問い合わせが、新聞に出てから1週間で17件ぐらいありました。今後、もっと格差を減らしていくためには補助制度を拡充していく必要があると思います。ただ完全な平等は難しいので、格差を減らしていくような支援ができるようになれば良いかなと思っています。フリースクールの補助制度は本当に助かっています。本当にありがとうございます。以上となります。

## ■依田様

やはり実際の体験に勝るものはないとは思いますが、一方で現実世界では時間的・物理的な制約がある場合もありますので、必ずしもすべての子どもが同じような体験をすることができるわけではありません。そうしたことを踏まえ、今後現実の体験とバーチャルの体験をバランスよく組み合わせることがより重要になるの

かなと思います。まず現実体験の一番の強みは五感をフルに使って体験ができる点か  
と思います。実際に物に触ったり、動いたり人と関わったりすることで深い学びが得  
られると思います。感情や記憶として深く刻まれますので、長期的な学びに繋がるか  
と思います。先ほども述べたように一方で制約もあるので、全ての体験を実際に行う  
のは難しい場合もあると思います。そこでバーチャルの活用という視点で考えさせて  
いただくと、バーチャルの利点としてはアクセスのしやすさが挙げられると思います。  
物理的に行くことが難しい場所、例えば、宇宙とか月、深い海の中とかエベレストな  
どの高い山とか、なかなか安全が確保されてないところでも、バーチャルの環境では  
現実として体験できることも挙げられると思います。あと私の母校では、コロナ禍だ  
ったので学園祭が仮想空間で行われました。実際アクセスしていくと旧友がいたり  
色々な人と話したり、仮想空間の VR やバーチャルの世界がそこまできていると思  
いましたので使い方次第というのが一番の感想です。格差も先ほどから挙げられていま  
すが、一方でゲーム依存やスマホ依存の弊害もあるかと思います。昨日のニュースで、  
ある自治体はスマホの利用制限を条例化する話も出ましたが、そうした部分に対する  
対策も今後、子どもに対しては必要になってくると思います。以上です。

#### ■長崎知事

次に高相さんをお願いします。

#### ■高相様

バーチャルですと、私の個人的な仕事・業務になりますが、まさに建築設計を 3D で  
してしまして、お客さんの前でモニターに映しながら建物を色々な角度から見たりす  
ることを進めており、それが当たり前ようになってきています。これが子どもたち  
に対してどういう影響があるかという、今の子どもたちはデジタル世代と言われた  
IT リテラシーが非常に高い子どもたちが多く、中学生でも、普段パソコンを使わ  
ないと言いながら、3DCAD を体験版で使わせてみるとどんどん進められます。私たち  
大人が四苦八苦しているところを、全くストレスやハードルなく進めて自分の思う通  
りの空間を描いてくれるから本当に感心してしまいます。そういうバーチャルの中で  
体験できる自分なりの作りたい空間が構築できるのは非常に便利で、もうなくてはな  
らないものだと思っています。

一方、その中で見せる空間は結局、紙面であり画面であるので、それがリアルで体  
験できるかという、紙面上では非常に建物がよく見えると思っていただけですが、  
やはり実際に建物ができるときが一番感動してくれます。バーチャルとリアルで大き  
な差が出ています。体験学習に来る子どもたちに対しても、紙面上でもできるかもし  
れないが実際造ってみるともっと楽しいから、時間のある子には実際、現場に行っ  
てもらい造っている現場を体験してもらいます。何だかんだ言って私たちは絵を描い  
ているだけで、「造り手あつての建築だから」ということで建築のダイナミックスさや  
醍醐味を伝えるようにしています。自分の息子の話になってしまいますが、ゲームが

大好きでマインクラフトという積み木を積み上げるゲームに一時期、非常にはまり、それを放っておいたら一つの町ができていました。進んだ大学が社会基盤という学科でしたので、マインクラフトから都市系の学科に進み、外を駆けずり回って測量したり、水質をはかったりとリアルを実際に学んでいるので、バーチャルがリアルに対しての入口であったり、そのまま進路に結びついたりしたのではないかと感じました。

保護者視点の話ではありますが、今の体験のバランスというのは非常に大事ですし、五感で感じる実際の体験は欠かせないものだと思いますので、社会を理解するきっかけになってくれるかなと思います。また体験の機会の経済状況による違いも、公立高校であればフラットにチャンスを与えてくださっていると思います。また無償化もどんどん進んでいますから、同じような体験が学校の教育の場ではいただけていると感じています。いずれバーチャルの利点を生かしながら現実の体験の機会があるということで、本物に触れられる場を増やすことは大事なかなと思います。以上です。

#### ■長崎知事

ありがとうございました。バーチャル 3D で絵を描いた子が、実際その現場を見たときの反応とやっていない子の反応で違いがありますか。

#### ■高相様

本当に良い質問ありがとうございます。2 日間、3 日間の体験授業でプログラムを組んでいただける子は、現場に行ってみて、その奥行き感、高さ感、迫力で違いを感じるらしいです。振り返ってみて、自分が 3D で作った建物に、スケールの感覚を当てはめてみてごらんとすると、実際見ると違うというところを感じてもらえる子は多かったです。

#### ■長崎知事

より主体的に感じるのですね。

#### ■高相様

またそこに責任を感じてもいます。自分が好きなように作ったのは良いけれど、それがこの空間の中では小さ過ぎる机であったり、機能に対して広すぎる空間だったりしたらもったいないねとか、そういうことを感じるきっかけにはなるかもしれません。

#### ■長崎知事

子どもに夢を育む体験として、成功体験や仲間との協働の体験とかがキーワードですが、そういう体験をするにあたって経済格差が影響を及ぼしているのでしょうか。例えば、海外旅行に行くのは知見を広める意味ですばらしいとは思いますが、冒頭の議論ではむしろ成功体験こそが重要だというお話で、そこも経済的な問題で左右されるような事例・実例があるということでしょうか。

## ■原様

学校現場においては体験の格差は無くなっています。成功体験をさせる場や積み重ねる場というのは学校の中で保障されています。ただ、家庭に戻った時、地域に戻った時は、教育格差があるかもしれませんが、学校現場の状況において、格差はないと実感しています。先ほど言った地域での格差はもしかしたらあって、場所によってできる、できないが出てくるとは思っています。

## ■長崎知事

様々な体験の提供主体があることは有効という議論をいただきましたが、学校現場以外のところでの影響、そこが乏しくなっていることが子どもの成長に決してプラスではないという感じですね。

## ■村上様

すべてが当てはまるとは限らないですけど、例えば学校で音楽を聴く会があったとして、子どもの中にはすごくそれに刺激を受けて、私もやりたいなと思ったとします。ただ、音楽をやるとなるとなかなか難しい家もあります。でも、バーチャルの良さは、その子が好きで、選べればそれに入り込む世界が広がってきており、そのようなものを上手に与えていくのも大人の役目なのかと思います。

## ■長崎知事

バーチャルは実体験の入口という位置付けだとすると、それを上手く活用すれば、学校外で起こりうるような体験格差を多少なりとも埋めることができる可能性も考えられるってことですね。石川先生どうですか。

## ■石川様

先ほど皆さんがおっしゃったとおり、経済格差は明らかに見える形でご家庭にあって、その格差によって体験できる色々な機会が多い子もいれば少ない子もいます。そのような中で、先生方はそれをできるだけ薄めるように、学校では気を遣い、工夫をして、どの子も認められるような、肯定感が高まるような取り組みをやっているはずですよ。私もそのような教員ばかり見てきました。ただ、学校外のところは、どうしても体験格差があるのかなと感じています。

## ■長崎知事

ご家庭の格差によって、興味関心を持って進もうという道が閉ざされないようすることが一つ重要なのかと思いますけれども、様々な体験機会の多様性の部分でも違いが出てきますよね。我々は、例えば外国の交流に高校生を派遣する時に、なるべくそういう機会に恵まれない環境にいる子どもたちに、そういう機会が提供できるように

配慮しようとしています。全部をカバーするわけにはいきなりませんが。

#### ■荻野教育長

確かにICTの発達によって、実際に行かなくても色々なものを知ることができたり、あるいは興味の入口を見つけることができる機会が増えたりすると思うので、その一つのきっかけになる使い方はすごく大事かと思います。ただ、学校は子どもたちに等しく、多様な体験の機会と子どもたちが輝ける瞬間、どこかで認められたり自分を肯定できたりというようなことを、それぞれの尺度で評価できることを目指していく必要があると思いました。そして、できる限り本物の体験を子どもたちにさせたいと改めて思いました。例えば、CDはある周波数がカットされているので、実際、生で音を聞いたり演奏を聞いたりするとCDで聞くのとはだいぶ違いますので、子どもの良い耳で聞かせるときには本物を聞かせたいと思います。そのような機会を学校はできるだけ提供できればと思います。先ほど篠原先生がおっしゃっていたように、行事の削減も考えていかなければいけないけれども、体験の機会も減らすことなく上手くやっていけたらと思います。

#### ■長崎知事

ありがとうございます。いただきました議論を我々もしっかり咀嚼しまして、これから山梨の子どもがそれぞれの可能性を見いだして、そこに向けてチャレンジできるような教育環境、人づくりの環境を目指し、引き続き努めていきたいと思っています。折に触れて、色々ご指導いただければありがたいと思います。今日は大変貴重なご意見と、そしてお時間をいただいたことに心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

#### ■石原まなび支援課総括課長補佐

大変お疲れ様でした。以上をもちまして令和7年度やまなし教育会議を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。